本当の教師とは何か？　滝田勝先生が残したもの

久保木芳徳　第８回（１９５６年）卒業

母校土浦一高を去って６５年、教えを受けた諸先生は、すべてお亡くなりになりましたが（ご存命でしたらお許しください)、遠い北海道に隔たって３６年になるわが身には、いま、すべて良い思い出だけが残っています。

私の場合、亡父の代わりのように、お世話になった滝田勝先生（１９１２～１９８５）に対する想いは、その後の私の人生の支えになっていたことに最近、気付きました。なぜそうなったかを、いま、母校関係の良き友人の皆様にお伝えできれば幸いです。

およそ、良き教師とは、古来３種類ほどあるといわれてきました。
第１群は、知識と技能を上手に伝えてくれる先生です。
第２群は、知識と技能を学ぶ方法までを伝えてくれる先生です。
第３群は、以上を伝えるだけではなく、生徒を感動させ、奮い立たせる先生です。

もちろん伝えるのは、知識と技能だけではなく、知恵と人徳といわれるものがそれぞれ、含まれることはもちろんです。いずれの範疇の教師であっても、教育の場をめぐる時代の状況と、環境に応じまして良い先生になり得ることは、間違いありません。滝田先生は明らかに第３群の先生でした。

偶然のことから土浦一高校の教師なられた独文学者、滝田勝先生は、１９５２年７月（４０歳）から、１９６３年３月（５１歳）までの１１年間、教鞭をとられました。ちなみにこの間、わが母校、空前絶後の快挙、１９５７年の甲子園野球出場を導いた責任者が滝田先生だったと言えば、母校関係者には思い出しやすいでしょう。この快挙の実現に当たって滝田先生が絶大なる尽力をなさったと聞いています。あの歴史的な木内監督（３回生）と共に、滝田先生による膨大な準備があって出場できたのでした。滝田先生自身も、文学青年でありながら、根はスポーツマンでもあったようで、旧制高校時代のサッカー競技では、「タンク」（戦車の意味）という綽名で呼ばれるエネルギッシュな活躍をされたそうで、想像に難くありません。

私たち８回生は、先生が着任した次の年から教えを受けました。どの生徒も、滝田先生だけは尊敬していました。なぜなら生徒を尊重したからです。英語を担当され、いつも印象的な授業をなさいましたが、それは先生から学ぶことのごく一部に過ぎませんでした。ゲーテの時代から現代に至る西欧文明の意味に

ついて、さらに重要なことは、真摯な人生体験の伝達でした。先生のあだ名は「ゲーテ」だった。「ゲーテ」から「全体性」ということを学んだと常々言われた滝田先生は、どんなときにも生徒を軽ずるようなことはありませんでした。

７０歳近くになって「少年」（１９７９年、審美社）という珠玉のような教養小説を出版された。土浦や神立の地で、感受性ある少年が大正時代の日本で、どの様に成長していったかを活写した自伝小説です。ゲーテの長編自伝「ウイルヘルム・マイスター」のような長編になる予定でしたが、がんのために急逝され、「少年」の出版で終わっているのが残念です。現在の地元の高校生には是非とも読んでいただきたい小説です。

先生と私は、お互いの時間の許す限り、先生宅にお邪魔して離れの書斎で古今東西の文明、哲学、文学、そして人生についてのお話を伺いました。優しい奥様がいつも、にこやかに迎えて下さり、お茶とお茶菓子をいただきました。それは、私だけではなく、訪れたどの生徒に対しても同じでした。

滝田先生にお聞きしたかったことがあります。そのゲーテが、彼の死後、自分の国にヒットラーが現れることを、予感しなかったのだろうか、ということです。おそらくそのお答えは、「およそ優越感というものは決して望ましいものではない。のみならず、やがて恐るべき人類の悲劇をもたらす」そう答えられたと想像しています。ゲーテは、「優越感」をどのように考えていたいのだろうか、大きな課題です。

ゲーテを深く研究された滝田先生は、ファウストの現代的意味を総合的に解析し重要な論文を書かれています。ゲーテ「ファウスト」小論（I）（II）があります。しかし、滝田先生がとくに注目したのは、ゲーテが文学作品を残しただけでなく、自然科学研究に膨大な時間を注いでいた点です。ゲーテは、人類の上顎に、「顎間骨」を発見しています。これは偶然ではなく、彼の自然研究は、ライプチヒ、シュトラスブルグの学生時代に始まり、自然科学論文を多数書いています。有名な彼のイタリヤ旅行にもリンネの本をもって出かけたそうです。著名な科学者ヘルムホルツは、ゲーテのことを当時、「自然科学の歩みに必要な指導理念を先見した最初の者である」と述べています（滝田論文：「ゲーテと現代」１９７４年)。とにかく、ゲーテは、文学と同様に自然研究にも情熱を注いだ稀有の人物であったのです。その現代的意義を滝田先生は語っています。

土浦一高校退職後は、先生は茨城キリスト教大学に移り、本来のゲーテのファウスト研究に戻りました。同時に若い人々のカンセリングに打ち込みました。1981 年に「少年」（日本初の教養小説、茨城文学賞）を書き上げると、年来のハイマートであったゲーテの国、ドイツに渡り、そこで半年間滞在し研鑽をかさねました。帰国後、がんで 1985 年逝去されるまでに、私たち教え子達に伝え、残された宿題が、「科学と文学」という名の雑誌の出版事業でした。

この「科学と文学」というテーマと題名は、実は寺田寅彦が１９１６年ごろ

から１９３３年までに、各種の雑誌、講座に、これ以上考察できないほど緻密に、そして芸術的と言えるほど心を打つ文章に纏められています。それらを一冊にまとめた本も２０２０年、角川文庫として出版されました。しかしそれで完成かというと、そうではなく、実は出発点なのです。現在、新たな緊急性、人々の生死にかかわる重要性をもって、このテーマがクローズアップされています。「科学と文学」の「文学」を科学・技術以外のすべての人間活動と広義に解釈すると、人類の存亡をかけた重大なテーマと言わざるを得ません。

以上を要約しますと、滝田勝先生は「自然科学を、文明の向上という目的なかで、全体として捉えよ。」と我々に言い残し、「科学と文学」という自費出版雑誌を自ら加わって創刊されたのでした。

最後に、本誌最新号の巻頭言を転載して、母校の皆さんのご意見を伺いたいと思います。

パンデミック十戒

１．　天災に人災を、加えるなかれ。

２．　餓（死）島の悲劇と旧日本軍参謀の無能無策を繰り返すな。

３．　無能有害な政治家を選ばないため、国民の良識を育てよう。

４．　政治家には、科学の知識・判断力の資格試験を課せ。

５．　公職選挙の立候補資格に、高校までの理科を含む知的国家試験を。

６．　義務教育の先生方には、最高の人材を配し最高の給料を与えよう。

７．　看護師と医師周囲の人々には医師への昇格試験制度を。

８．　医療非常時に備え、自衛隊以外にも医療予備員体制を。

９．　企業と国家の巨大化を抑え、個人の創意工夫で世界貢献を。

１０．　無知・憎悪・強欲の代わりに知恵・思いやり・気前良さを。

【写真】五十年を経ても志は変わらず。
滝田勝先生のドイツ文学科学生時代と、晩年のお写真。

【ご略歴の代わりに】

1912 年茨城県新治郡柿岡町大字柿岡に生まれる。茨城県立土浦中学校卒業（第３９回生）、旧制水戸高等学校主席入学、１９３７年（昭和１２年）に東京大学独文科卒業、同大学院入学。年来のテーマであるゲーテ、ファウストの背後にある哲学を探求すると同時に、ハンス・カロッサの新作「成熟せる生の秘密」を翻訳した。

しかし、この１９３７年は日本の運命にとって、決定的な年であった。日中戦争が勃発した。このために、１９３８年大学院を退学して、現実に進行している世界の問題に直接取り組むために、「東亜研究所」にその設立から参加した。この研究所の意味と役割については、多くの謎が残っているが、一部は「科学と文学」１～２号の倉持論文に一部紹介されている。当時の日本は（実は今でもそうであるが）欧米をはじめ世界の動きに関してあまりにも、無知であった。というのも、当時、世界の新しい潮流はすべて外国語で日本に入ってくるのであり、日本でこれを理解し、真の意味で解説できるのはできる人もごくわずかだった。滝田先生がアカデミックな独文学教室を離れて、東亜研究所

に移った本当の理由は、そこにあったのではないかと想像される。